

# 成果報告書

記入日 2016 年 5 月 24 日

氏名 賀川恵理香	渡航先国名 パキスタン・イスラーム共和国	所属機関 バハーウッディーン・ザカリヤー大学ウルドゥー語・文学研究科
研究テーマ： パキスタンにおける宗教と慣習の関係について -70年代後半～80年代「イスラーム化政策」時における「パルダ」とイスラームの共存-		
研究期間： 2015 年 5 月 ～ 2016 年 4 月		
研究成果（概要） ウルドゥー語の運用能力が上がり、「パルダ」の研究に必要な文献収集及び実地調査をすることができた。		
研究成果（詳細） <b>①大学の授業</b> 渡航後4ヶ月間はウルドゥー語の安易な文章の読解やその要約、及びウルドゥー語会話練習をして基礎語学力の向上に努めた。そして、5ヶ月目にあたる9月より通常授業（大学の学部3年生の授業）の聴講をはじめた。受講していた授業は「ウルドゥー文学史」（週3時間×3ヶ月程度）で、ウルドゥー語の成立過程や、ウルドゥー語詩における用法などについて学んだ。学期末にはパキスタン人学生と共にテストも受け、21点/30点を取得した。（最高点は23点） その後、2016年1月20日にハイバル・パクトゥーン州で起きた銃撃事件によって一時大学が閉鎖となるが、大学再開後の2月初旬頃から再び聴講を開始し、今度は「ウルドゥー文学史」だけでなく、「ジェンダー・ディスカッション」、「ウルドゥー文学」など、帰国直前まで様々な授業を受けた。 帰国前は期末テストを受け（85点/100点）、一年間の学位（Advance Diploma In Urdu Language）を取得した。 留学を通してウルドゥー語語学力は以下の通り向上した。: Writing: テーマに沿ったウルドゥー語作文を書くことができる Listening: ニュースを聞いて8割方、ネイティブ同士の会話を聞いて9割方理解できる Speaking: 場に応じた正しい敬語を用い、ネイティブの使う冗談などを交えて話すことができる Reading: ウルドゥー語での新聞、比較的難解な文献を読むことができる		
<b>②サライーキー語及びパンジャービー語の学習</b> サラーイーキー語とは、私の留学していたムルターンの現地語で、留学先の大学（バハーウッディーン・ザカリヤー大学）にはサライーキー語学科が存在する。留学当初はサライーキー語を学ぶ気になれず（ウルドゥー語の学習で手一杯であったため）無視していたが、留学開始半年が経過した頃から必要性を感じ学びはじめた。基本的な文法構造はウルドゥー語と似ているものの、その語彙や語形変化にはとても大きな違いがあり、学ぶ上でとても苦勞を強いられた。基本的には寮の友人達の手を借りて基本的な文法、語法を学び、寮の内外で実践的に使用して練習するという方法をとった。パンジャービー語が母語の友人も多かったため、同時にパンジャービー語も学ぶ努力をした。		

結果、ウルドゥー語の語学力には及ばないものの、ある程度はサライキー語やパンジャービー語での意思疎通ができるようになり、その後の人間関係を作る上で大いに役立った。そこでは、外国人としての自分が彼らの母語を話すということの意義を感じた。これに関しては③で詳しく述べる。

### ③人間関係の構築、学び

パキスタンにおける人間関係は、日本におけるそれとは全く異なり、あらゆる意味で人と人の距離が「近い」ということができると思う。寮生活のなか、当初はそのプライバシーの壁の低さなど、様々な面で戸惑うことが多かった。特に最初は語学力の乏しさのせいで、自分の意思をうまく伝えることができず、大きなストレスを感じた。

半年ほど経つと言語能力が上達し、信頼のできる友人達を作ることができた一方、その（特に宗教的な）価値観の違いから、人とぶつかることも多くあった。その度に友人に協力してもらって自分なりに彼らを理解しようと努め、どうしても理解できないときは自分のなかで妥協点を探していた。その過程を通して、言語を学ぶということ以上に、現地における生きた人間関係について学ぶことができたと思う。

また、私の通っていた大学にはサライキー語やパンジャービー語を母語とする学生や教員が多く、普段はウルドゥー語で話していても身内同士や友人同士となるとそれぞれの母語を使って会話するという光景をよく見かけた。そのなかで強く感じたのは、サライキー語やパンジャービー語を用いてする会話と、ウルドゥー語のみを用いてする会話とでは、その会話内容や話者同士の距離の取り方が異なるということである。

どうやら彼らにとっては、ウルドゥー語はオフィシャルな言葉で、サライキー語やパンジャービー語こそが自分たちの言語だという認識があるようであった。よって、打ち解けた関係のなかでこそ母語での会話が可能なのであり、その会話のなかでは個人の境界がとけあっていたように感じた。

実際、自分がサライキー語やパンジャービー語を学び、普段の会話で使用するようになってから、さらに現地の人びとの輪に溶け込むことができたように思う。そこでは、外国人の私が彼らの母語を学ぶ姿勢を見せることで、宗教や国を超えた「仲間意識」が生まれたのではないかと考える。

### ④「パルダ」に関する研究

最後に、研究テーマに沿っての活動について述べたい。留学前の計画として大きく3つの柱を立てた。:

#### a. 関連文献の収集

b. サイド・アブル・アアラー・マウドゥーディー『パルダ』（1940）の購読

c. 50-70代女性へのアンケート調査

a. b. cに関する詳細な成果を述べる前に、前提として辞書上での「パルダ」の定義をさらう。:

- ・「女性を公的空間から隔離する社会慣習」（新版 南アジアを知る事典より）
- ・「南アジアにおける女性を隔離する規範や慣習」（岩波イスラーム辞典より）

以上を踏まえて、研究に当たっての自分の見解は以下の通りである：

「パルダにはその実践の方法から服装と空間分離の二つの側面がある。この二つの側面からその具体的な方法及びその裏にある概念を読み取っていきたい。」

では、留学中実施したこととして上記 a. b. c の具体的な成果を述べる。

#### a. 関連文献の収集

→比較的初期の頃から取り組むことができた。ここでは主に「パルダ」に関する宗教的側面から書かれた文献と、ジアーの政策についての歴史的側面、社会学的側面から書かれた文献を中心に収集した。

方法としては、ラーホールやイスラマバードへ行った際に図書館や書店をめぐったり（ムルターンでは比較的本が手に入りにくい状態にあったため）、有識者の方々にテーマと関連する文献の示唆をいただいたりした。図書館では貸し出し可能なものはコピーをとり、そうでないものは手持ちのカメラに写真として収めた。

収集した文献は英語で書かれたもの、ウルドゥー語で書かれたもの計50冊ほどである。特に日本では手に入らず、向こうでも絶版となっているような文献に関しては重要度が高いといえる。

当時の文献としては、ジャマーアテ・イスラーミーに行った際、『クルアーン注釈』のデータがすべて入ったDVDを入手したことが大きな成果といえる。しかし、それ以外の当時の雑誌のコレクションなどは、量が膨大すぎて分析の仕方がわからず、手をつけられずに帰ってきた。

#### b. サイド・アブル・アアーラー・マウドゥーディー『パルダ』（1940）の講読

→10月頃から取り組みはじめた。そもそも文献が手に入ったのが9月頃のラーホール訪問の際で、同著の英語訳に至っては帰国直前の4月にやっと手に入った。

本著を講読する意義は、以下の通りである。

70年代後半から「イスラーム化」を遂行したジアー・ウル・ハクは、南アジアの代表的イスラーム復興主義者であるマウドゥーディー及び彼が率いていたイスラーム政党「ジャマーアテ・イスラーミー」を思想的中心としていたため、ジアーの行った「イスラーム化政策」においては、当然マウドゥーディーの著作が重用されていると考えられる。よって、当文献を最初に講読することで、ジアーの「イスラーム化政策」における「パルダ」の位置づけを学ぶことができる。（申請書より抜粋）

本著を講読するに当たっては、イスラーム教の専門的な知識が必要とされたため、留学先の大学のイスラームアート学部の先生にご協力いただいた。そこにおいては、クルアーンの詳細な解釈からアラビア語の用法、またペルシア語まで、じっくりと教えていただくことができた。

また本著に関しては、講読するだけではなく、全文訳にも取り組んでいる。留学中は講読することに精一杯だったので、帰国後これから全文訳を進めていきたい。そこではただ訳をするだけではなく、注を付けることによって、より詳細な見解と共に本著の読解をしていく。

#### c. 50-70代女性へのアンケート調査

→身動きが自由にとれなかったため、結局満足のゆく聞き取りができたのは一人だけであった。しかし、これに代わって、比較的自由に動き回れる寮内で女子学生からの聞き取り調査を行った。それに関して新たなdという項目を設けた。:

#### d. 寮の女性100名からのアンケート調査および十数名からの聞き取り調査

→聞き取り調査の目的：若い女性の「パルダ」に関する意識の調査をする。彼女たちの言説から現在のパルダの実践の形、その奥にある意識を探る。

「パルダ」の概念の変遷を知るためには、現在の状況をまずおさえることが必要であると感じたため、寮の女性を対象にしたアンケート調査及び詳しい聞き取り調査を行った。

100名のアンケート調査では、主に服装の着こなしの観点から、状況によってどのようなスタイルの変化があるのかを調べた。アンケート用紙には対象者の家の年収や家族体系について尋ねる欄も作り、家の状況とその実践の関連性などを統計的に調べられるよう工夫した。

十数名からの聞き取り調査では、家系図や家の間取りなどを通じて、家の中でどのようなパルダの実践が行われているのかを、服装の観点、空間分離の観点両方からより詳細に調べた。ここではより個人的なことを調べるため、あらかじめ信頼関係の出来上がっている学生を対象にした。上記2点の分析及びその結果のデータは、卒業論文の一部として使用するつもりである。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

### ・ラマザン中の断食体験

留学2ヶ月目の6月からラマザン月が始まり、寮のほとんどの学生が帰省してしまうということがあった。寮の食堂や売店も断食時間に合わせて開くため、朝は午前1時半から午前2時半まで（サヘーリーの時間帯に合わせて）、そして夜は午後6時半から午後8時まで（アフターリーの時間帯に合わせて）しか食べ物を買うこ



黄金に輝く麦畑で



とができなかった。寮にはキッチンがあり、自炊もできる状況ではあったが、寮に残った数少ない学生達はその多くが断食を実践しており、昼間に調理することがはばかられる状態であった。そのため、朝だけヨーグルトとマンゴーを食べ、昼は何も食べず、夜だけ自炊または食堂でご飯を食べていた。そんなある日、仲良くしていた友人の一人に、断食を一緒にやってみないかと誘われた。断食にはかねてから興味があったため、事前に「断食中

ワーガボーダー（インド国境）でのセ  
レブニー。向こう側はインド。

にしてよいこと」（入浴、うがいなど）と「断食中にはならないこと」（水を含む全ての食物を身体に入れることな

ど）を教えてもらい、断食を実践してみることにした。前の晩午前2時頃断食前の食事（サヘーリー）をとり、気を張って臨んだ。夏場で気温が47度付近まで上がるなか、水を摂らないというのはかなり体力的にしんどかったが、断食明けに食べたカジュールの実（ナツメヤシの実を乾燥させたもの）はまさに天の恵みといえるほど甘く、身体に染み渡った。その晩友人達と一緒に断食明けの食事（アフターリー）をした時には、皆から「よくやった！」との言葉ももらい、なんだか誇らしい気分になった。

その後ラーホールで断食明けのお祭り（イード）に参加させていただいた際には、「断食を実践したあなたにはイードを祝う資格がある」と人から言われ、外国人の自分が彼らの宗教的なイベントである断食を実践するということの意義を実感した。このように、その国の言語を習得するだけではなく、彼らの生活に積極的に合わせてみることで、その国の文化、社会を理解する上でとても重要なことであると思う。



留学中お世話になった先生ご一家と。

## 今後の社会貢献

まずは今回の留学の成果を卒業論文の形で発表する。そして修士課程に進み、今後の南アジア研究に寄与したい。